



山下文男 著

「地震予知の先駆者 今村明恒の生涯」

〈青磁社, 1989年9月1日初版, A5判, 316頁, 3000円
(本体 2913円)〉

地震学の創世期から敗戦直後まで震災予防と地震予知研究に邁進した今村明恒(1870-1948)の初めての伝記で、一般向けの好著である。三陸大津波などを執筆中に今村に傾倒した著者が、学界長老の勧めと励ましを受けてまとめた。

今村明恒は、日本の地震学の重要な基礎を確立しただけでなく、明治・大正・昭和期の4つの巨大地震に劇的にかかわった稀有の地震学者であった。

理科大学物理学科1年のときに濃尾地震(1891)の現地調査を頼まれて地震学に志すが、陸軍の数学教官で生計を立てながら無給の東大助教授を務めること20数年。この間、50年以内の東京大震災の警告が「大森・今村論争」を惹き起こし、2歳年上の大森房吉教授に激しく論駁されて社会的非難を浴びる。しかし18年目の関東地震(1923)で警告どおりの惨状を目の当たりにし、外遊中の大森に代わって事後処理の中心となる。この年大森の病没によって53歳でようやく東大教授となり、研究と啓蒙に活躍し、国民から「地震博士」と親しまれた。その頃から南海地震(のちに東海地震も)の発生を予想、前兆を捉えるための壮大な予知観測網を計画したが予算が得られず、私財を投じ家族を動員し、篤志家の助力を得て南海地動観測網を展開する。退官後も蓄えを注いで10数年にわたって観測事業を続けるが、戦争と敗戦による混乱で遂に挫折。しかも昔の陸軍教授の肩書のために恩給を停止されて窮迫し、予測した巨大地震の相次ぎ発生(1944, 1946)を見届けながら失意のうちに亡くなった。

著者は、以上のような今村の学者としての軌跡を克明にたどるだけでなく、直情径行であくが強く人に嫌われやすかったといわれる素顔を明らかにしよ

うと、御健在の8人のお子さん方から多くの事実を聞き出し、薩摩藩士の三男に生まれた明治男児の確固たる生涯を浮き彫りにした。巻末に28ページにおよぶ略年譜が付いている。

今村の一生は仕事のうえで壮絶だったばかりでなく、私生活では貧乏に苦しめられた。家が没落したために少年時代から大学まで苦学し、乏しい収入を得てからも親や弟達への援助が続く。それだけに、退官後の新居「煙霞荘」での束の間の平穏な暮らしぶり、今村作詞・二女作曲の祝の歌で始まる家族の誕生会など、温かい目で描かれた家庭的エピソードは心をなごませてくれる。多趣味ぶりやタレント性、人情家の一面も面白い。家長として家族の行動を一々理屈で律している頑固さもほほえましいが、これを外でやって敵を作ったのだろうか。

今村の地震研究は震災軽減という一点に収斂した日本的なものだが、幅広い業績の中には基礎的なものや世界に適用できる画期的な方法論もある。断層モデルや地震テクトニクスにつながる先見的な地震観は、今日高く評価されている。しかし本書は、主に震災予防と地震予知に直結した研究・啓蒙活動に絞っていて、今村自身の歴史地震学や関東地震後の地震学界の新しい動向などにも触れていない。この点が専門家にはやや物足りないかもしれないが、一般向けとしては直截的で読みやすいだろう。退官後も衰えをしらない活動に今村の真骨頂をみる著者は、そこかなりのページをさき、私設観測網に関する興味深い新事実などを多く記している。

今村の生涯の悲劇は、研究職に就けなかった最初の不運や戦争も大きい。合理的な思考が不得手な国民性、浅薄で無責任なジャーナリズム、軍備増強には熱心だが震災予防・地震研究には冷淡な政府、分を弁えずに消極的な学界、といったなかで一人突出して先鋭果敢に震災予防の信念を貫いたところにもあっただろう。そういう社会的状況は今も基本的には変わっていないから、本書は大きな現代的意義をもっている。多くの人々がこの本を読み、今村明恒の人和偉業を知ると同時に、わが国の地震防災の将来に思いを致してほしいと思う。

(建設省建築研究所国際地震工学部 石橋克彦)